
奴隷王の料理人

こかげ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奴隷王の料理人

【Nコード】

N9805P

【作者名】

こかげ

【あらすじ】

王様、奴隷騎士、怪しい神父、宰相などが権謀術数を繰り広げている王国で、料理人を目指す貧しい少年（少女）が出世していく話になる予定です。途中でラブコメ要素も入る（予定）。

グロー二通り第一教会（1）

手始めに言っておくが、俺はやくざ者だ。

決して、ろくなもんじゃない。

ごろつき、と言ったほうがいいかな。

周りにいる連中も、皆、そんな奴らばかりだったし、俺の母親も、血が繋がってるんだか繋がってないんだかよく分からない兄弟たちも、あらかたそんな奴らばかりだった。

本当に、まともなものじゃないんだ。

（別に、繰り返すことじゃないか。俺の見た目を見てもらえば、一瞬で分かるよな）

俺は、それほど腕っ節の立つほうじゃない。

むしろ、ひよろひよろしている。

その上、赤い髪の毛がぼうぼうと突っ立ってるから、小さい頃のあだ名は「かかし」だった。

栄養が足りなかったんだろう、とよくからかわれるけど、俺はそれほど気にしてない。

自分で言うことじゃないが、俺は頭だけは、これでも結構いいんだ。

文字だって、一応それなりに読めるしな。

俺より頭の悪い奴がごろごろしている、このグロー二通りでは、文字が読めるだけで重宝されたりするんだ。

手紙を代筆したり（ごろつきだって、手紙を書いたり、妙なポエムを書いたりしたいときがある）、酒場で新聞を読んでやつたり、子供に文字を教えたり。物心ついた頃から、やることはそれなりにいろいろあった。

俺に文字を教えた町の神父、カル口さんだって、たまに俺に神父の服を着せて、えせ神父をやらせたりしてるしな（あれ、いいのか

な。絶対、聖職者として間違ってるよな。

だから、俺はそれほどへこまずに済んだんだろう。

どんな場所で生まれても、俺はそれなりに、誰かに必要とされている、そう思ってたから。

もし、文字が読めなかったら、俺は多分、その辺のごろつきと全く同じ生活を送っていたことだろう。

つまり、毎日ごろごろとその辺にたむろし、喧嘩を吹っかける相手を探してるか、一獲千金を狙って、訳の分からない秘密を囁きあったり、なんかそういうことで時間を潰しながら、一日中退屈してなきゃならん、ということだ。

まあ、俺はそれなりに賢いから、それでも何か裏道を見つけ出していたらうけど。

でも、文字が読めなかったら、俺は生涯、料理本を読めなかったかもしれない。

そう考えると、自分の幸運にどきりとする。

幸運……料理というものに出会うまで、俺はずっと、この通りに生まれたことが、自分の不幸だと思っていたけれど。

でも、出会ってしまった今では、よく分かる。

情熱を傾ける何か。とてもとても好きで、それなしにはいられない、そんな何か。

（別に誰か、でもいいかもしれないけど）

それが、俺にとっては、料理だった。

（意外かもしれない。でも俺は、これが天職だと思って疑ってない）
そんな何かに出会えなかったら、俺は半分死んだような一生を送っていたかもしれない。

自分が何をしたいかも分からずに、ただ日々を磨り減らすようにして。

だから、出会えたことが、発見できたことが、俺の幸運なんだ。
そう思えば、あの妙なカル口神父にも、十分広い心で耐えられる
というものだ。

(……いや、やっぱり耐えられないかも)

「ロZZズ、ロZZズ君」

あの、鼻にかかったような高い声。

カル口神父特有の、妙にいんちきくさいしゃべり方。

猫撫で声って、ああいうのを言うんだろ。

見た目こそその辺の肥満親父(しかも黒いカール髭つきの)だが、声は教会の屋根に住む鳩みたいに優しく、妙に甲高い。

別に嫌いじゃない……嫌いじゃないんだ。それこそ、恩師といつても良いわけだし……と、いろんな理屈を付けてみても、結局のところ、俺は……カル口神父が苦手だ。

あの声さえ、なければいいんだが。

普通に親父くさい、野太い声とかだったら、まだしも良かったのに。

なんであんなしゃべり方なんだろ。しかも……。

「ロZZズ、無視しないでください、ロZZズ君」

「うわっ、いきなり背後に立たないでくださいよ、神父！ なんでそう、いっつも俺の背後を狙ったように現れるんです？」

「ちゃんと声、かけましたよ。貴方が聞いていないだけです」

神父服の胸を膨らませるようにして、カル口神父は言った。

ふっくらした頬を丸くしているのは、ひょっとして拗ねているのだろうか。

いや、拗ねるとか拗ねないとか、肥満親父には全く似合わないから。もしそうだとしても、俺は絶対に認めないから。

断固としてその可能性を否定した後、俺はまじまじと神父を見つめた。

「何か、用ですか」

「その通りです。御用ですよ、ロZZズ君」

「御用って……これからムシヨにしょっぴかれるような言い方は止

めてくださいよ」

「ほほう。身に覚えでも？」

「ありませんよ！」

「即答ですね。しかし、いかにも怪しい、怪しすぎます！　ここで信じるなど、カルロ四十二歳の直感が言っています。ロッズ君、私のいないところで、道をあやまつてはいないでしょうね？　どこかの娘さんを泣かせたり、していませんか？」

「してませんって」

「貴方が道に迷うなら、神の名のもとにそれを導くのが私の役割です。さあ、懺悔なさい！　今すぐ！」

「してねえって言ってるだろ！　決め付けんな、この腐れ神父！」

「んまつ、汚い言葉使いを！　どこで覚えてきたの、母さんは悲しいわ！」

「うわ、やめてくれって……頼むから、そういうの」

れっきとした中年親父が、くねくねと身を擦っておかま声を出す。そんな光景を、正面から見せ付けられる俺。思っただけど、これって視覚の暴力、っていうんじゃないのか。

とにかく、昼間からムダに疲れた。

その上、話は遅々として進まない。

言っておくけど、俺のせいじゃないぞ。俺のせいじゃ。

「……なんか、話があったんじゃないかなかったんでしたっけ」

何とか話を戻すべく、俺は疲れた声を絞り出した。

「用がないなら、あっち行っててくれます？　俺、この料理本で、ちよつと分からないことがあって、調べてみたいんで」

「おや、まだ分からないことがあるんですか？」

「ありますよ。そりゃ」

外観こそぼろぼろで、数百年前の遺跡といっても誰も疑わない、グロー二通り第一教会。

蔦に半分隠された、煉瓦造りの壁。ほとんど崩れ落ちて、一本しか残っていない尖塔。

かつて、この通りがそれなりに華やかだった頃に建てられたものだ。

けれど内部は本当にぼろぼろで、カルロ神父がやってくるまで、誰も住めるとは思っていなかった。

それを今の状態にまで蘇らせたのが、カルロ神父だ。

部屋の壁に貼ってある、青と白の壁紙は安物だという。

でも新しく綺麗だし、かといってけばけばしくはない。

見事なステンドグラスは全て壊れてしまったので、普通のガラスだけれど、光が入ると、丸天井の絵がうつすらと輝いて見える。

教会の庭から発掘されたらしい、少し翼の欠けた天使像が、入り口でにつこりと見下ろしていた。

白く、ふつくらと膨らんだ頬が、少しカルロ神父の笑顔に似ているような気がする……とは、思っても俺は口にしない。断固として。

地下室も発掘された。

教会ではワインを少し使うから、それを貯蔵しておくためのものだが、俺はそこに、ちょっとした食材をこまごまと持ち込んで、貯めている。

何より魅力的なのは、厨房と、その横にある小部屋だろうか。

数十人分の料理ができる、大きな料理スペース（繰り返しすが、この教会もかつては立派なものだったんだ）。

その隣の部屋に本棚を並べて、神父はいろんな本を置いていた。

堅苦しい神学の本。星の読み方。子供向けの本。外国語で書かれた本。そして、料理本。

ちよつと断れば、誰でも立ち入って読むことができる。もつともこのグロー二通りで、本を読もうとする奴なんて、滅多にいないわけだが。

カルロ神父と知り合いになってからまもなく。俺は、ここの料理本に夢中になった。

ガレット。タルト・タタン。レアチーズケーキ。エクレア。マドレーヌ。

今でも覚えてる。

最初は、お菓子から始まった。

もちろん、当時の俺が甘いもの、カロリーの高いものに飢えていたのは確かだが、それ以上に、ページから立ち上るような温かさ、お菓子が持っている幸福な空気が、その頃の俺には必要だったんだろう。

俺の知らないもの。

（こんなものが、世の中にあっただんだ）

驚き。

懂れ。

カル口神父は、教会の庭で鶏を飼うことを許してくれた。そこから卵を収穫しては、俺はせっせとお菓子を作った。作っては、やってくる子供たちに配った。

そのうち、お菓子だけでは飽き足りなくなってきた。

そうして、冒険が始まった。

「貴方のお陰で、私はまだまだ素敵な体型を維持できそうですよ」
カル口神父が、いかにも満足そうに言ったことがある。

素敵な体型？ 俺には、満足げに太った鶏のようにしか見えないわけだけど（カル口神父は身長が低い。これで背が高かったら、いったいどんな肥満男になっていたんだろう）。

「素敵？ まさか、自分の体型が素敵だと思っているんですか？」

「ええ、もちろんです。威風堂々とした、男らしい体型だと思っていますよ。苦労続きの人生で、痩せ衰えてしまっただけは台無しですからね」

「……はあ。神父って、本当に幸せそうな人ですよ」
他に、言うことが思いつかなかった。

実際、俺は神父のことが、たまによく分からなくなる。

なんで、神父のような人が、こんな裏通りの教会にやってきたのか。なんで、こんな生活をしているのか。

いくら清貧を尊ぶ聖職と言ったって、わざわざ裏通りのぼろ教会

に埋もれたい酔狂な人間なんて、そうはいないだろう。

大量の本。崩れた教会を蘇らせるだけの金（それでも、とても裕福とは言えないようなのだが）。たまに神父の荷物から出てくる、着古しているけれどとても高級そうな服。そして、俺には窺いしれない、いろんな知識を詰め込んでいそうな、小さくてよく光る黒い眼。

聖職者の服を着ていなければ、ただの、にこにこした太った親父として人波に紛れてしまいそうだけれど、こう見えて神父は、普通の人じゃないんだ。

俺は、カルロ神父のことは、本当に何も知らないのかもしれない。（……でも、今更、聞きづらいよな）

昔、何があっただんですか。

何があつて、ここに来たんですか？

神父は、何者なんですか？

いろんなことを教えてもらって、それなりに長い時間を一緒に過ごしているけれど、俺は未だに、そんなふうに問いかけたことはない。

「何が、知りたいんですか？」

カルロ神父が、穏やかに問いかける。

一瞬、ぎょつとしたけれど、すぐに料理本のことだった、と思いつ出した。

俺は、手元を開いた本のページに、目を落とした。

「……あのですね。ブーケガルニって、何ですか、神父？」

「ブーケガルニ……貴方、いつも使ってるじゃないですか」

「え？」

「ほら、あれ」

神父が指差した先には、厨房の天井に吊り下げられた、乾燥させた香草の束がある。

教会の裏庭に薬草園を作って、俺がたまに収穫しているものだ。肉料理とか、普通の料理にちよつと香味を添えたいときに、好き

な葉を選んで入れたりしている。

「ブーケガルニって、いろんな香草を用途に合わせて取り合わせたスパイスのことですよ。言葉は大仰ですけど、そんなに厳格に決まっているわけでもないですし」

「へえ……」

俺は驚いて、天井を見上げた。

呪文みたいな言葉だなと思った。

貴族の家では、どこでもそんな呼び方をしているのだろうか。

俺だったら、単に香草とか香辛料とか言うけどな。

「貴方、好きですよ。ああいう香草」

「え？」

俺が見つめると、神父はつぶらな目につこり笑った。

「料理ごとに、いろんな香草を使い分けたり、生の葉と乾燥葉を変えてみたりするじゃないですか。ああいうちょっとした使い分けが、本当に好きですよ」

「ああ、だって、あれは……」

俺は口ごもった。

大層な理由じゃない。

料理本にはどれにも、「食材を選ぶことが基本です」とか何とか、書いてある。

新鮮な肉の見分け方とか、保存方法とか。

でも、俺たちが暮らすこの場所で、上等で新鮮な食材が手に入ることなんて、ない。いや、ないわけじゃないけど、とても期待はできない。

ありあわせのもので、やっていくしかないんだ。

肉だって、いい部分は手に入らないから、端肉とか、レバーとか。野菜だって、しなびた先っぽとか。

だから、工夫するしかないじゃないか。

できるだけいい出汁を取るにはどうしたらいいか、とか、臭みを消すのにどの香草がいいか、とか。

乾燥肉でどれだけ生肉の味に迫れるか、とか。

俺の料理は、基本的にそんなことばかりやっている。

料理本に載っているような、上等な食材をふんだんに使ったものを作るなんて、そんなことは夢のまた夢だ。

一生、夢かもしれない。

「おや、遠い目をしていますね」

カル口神父が、いかにも不思議なものを見た、という口調で言う。「ううむ、悪くないですね。心身ともに未発達で不安定な青少年が悩める図、というのは。もう少し見た目に気を遣ってはどうか、と思います、それでもなかなか、様になっているではありませんか」……」

カル口神父は、神の名のもとに、俺を試しているのだろうか。さもなくば、神父服を着てはいるけれど、実は心の中は真っ黒なのだろうか。

別に後者でも驚かない。俺は驚かないぞ。

そんなことを心の中で思っていると、神父が驚いたように高い声で言った。

「おやおや。いけません、話を逸らしましたね、ロツズ君？　せっかく私が大事な話をしに来たというのに……。悪い子ですね！」

「いや、全力で話を逸らしていたのは、あんたのほうなんだけど。いつたい、どんだけ人のせいにすれば、気が済むんだよ」

疲れた小声で呟いても、カル口神父には通じない。

「まあ、貴方の将来を決める一大事になるやもですから、貴方が緊張して、聞きたくないと思うのも分かります。しかしロツズ君、勇気を出すですよ！　貴方には私という、とても頼もしくて優しい味方がついているのですからね！」

「……はあ」

どうでもいい。黙っておこう。

「ロツズ君」

ずい、と詰め寄られた。

視界に、白く太った親父の顔が広がる。

カルロ神父、鼻息荒いよ、鼻息。

「よく聞いておきなさい。実は、来月頭に、この隣街のリベルタで、料理のコンテストがあるのです!」

は？ 料理のコンテスト？

次の瞬間、俺の脳裏に、青空の下に並べられた白いテーブル、賑やかなファンファーレ、のぼり、集まってくる人々……。

じゅうじゅうと肉の焼ける匂い、あでやかな飾りつけをされた皿の数々。審査員たちのジャッジ、そのたびに沸き起る歓声。一寸先は闇か、それとも名誉の栄冠か？ このコンテストを制する、幸運かつ実力ある覇者は誰か！ エトセトラ、エトセトラ。などという光景が繰り広げられた。

「ロZZ君、ロZZ君」

親父の鼻息で、我に返った。

いかん、ちよつと夢を見すぎたらしい。俺は、カルロ神父の鼻息から逃れるようにして、ちよつと後ろに下がった。

「こ、コンテスト?」

「そう、コンテストです」

神父が、厳かに言う。

「リベルタの貴族、ガーシュイン男爵のことは知っていますか？

あの辺りでは相応の実力者として知られています」

知るわけない。

「俺が、貴族のことなんて知ってるはずが……」

「そうでした、そうでした。貴方に分かるよう、丁寧に細かく説明してあげるとですね…… ようするに、悪代官です」

「……」

どこが「丁寧に細かい説明」なんだ。

と突っ込みたいところだが、それをやるとまたややこしくなる予感がしたので、俺は重々しく頷いてみせた。

「なるほど、よく分かりました。悪代官なんですね。……って、悪

代官とコンテストに、どんな関係が？」

「コンテストの主催者が、その悪代官なんですよ。コンテストの勝利者は、悪代官の家に料理人として召し抱えられるそうです。悪代官ではありませんが、相当の金持ちですから、これは出世のチャンスですよ！ ロッズ君！」

「悪代官の家に……料理人として？」

俺は深く眉根を寄せた。

深呼吸して、ちよつと考えてみる。

貴族の家の料理人。

それって、どのくらい凄いものなのか、俺には分からない。

貴族の家の敷居なんて、またいだことすらないんだ。内部ではきつと、毎晩、仮面舞踏会みたいな光景が繰り広げられてるんだろうと思うんだか、俺にはそれ以上想像もつかない。

でも……でもだ。

「……ぴかぴかの鍋とか、並んでるんでしょうね？」

思わず、間抜けな質問をしてしまった。

しかし、カル口神父は真面目に頷いてくれた。

「それはもう。大中小、どころか、何種類も用途別に並んで置いてありますよ。広くてぴかぴかの炊事場、高価で新鮮な食材、そして言いつけどおりに動く下働きの女中たち……」

「……」

「考えてもみなさい。お金をけちつて一人分の干し肉で二人分のスープを作るとか、そんなことはもう考えなくてもいいんですよ？」

貴族のことですから、晩餐会だつてしよつちゅう催されるに違いありません。絹のテーブルクロスを敷いた大テーブルに、輝く銀の食器類、惜しげもなく繰り出される数々の珍味、美食、それがすべて、貴方の号令のもとに並べられていく……」

「か、カル口神父、カル口神父……」

俺は、額に手を当てて呻いた。

まずい。

俺、ときどきしてる。

これまでの十数年の人生で、恋愛なんかしたこともないけど、ひよっとしてこれ、恋愛よりときどきするかもしれない。

「何なんですか、一体。俺を焚き付けて、何かもくろんでるんですか？」

「まさか。そんなことをして、私に何か得があるとでも？　そもそも、貴族との関わりなんて、私はあまり好きませんよ。できればあまり、係わり合いになりたくないと思っっているぐらいです」

……あれ？

一瞬、カル口神父の目が、影を帯びて沈んだように見えた。気のせいだったかもしれない。ほんの一瞬だったから。

「神父？」

「しかし、貴方はあれですねえ」

顔を上げた神父は、困ったように微笑んでいた。

「本当に、料理するのが好きなんですネ」

白いふつくらした顔に、どこにも暗い影など見えない。やっぱり、俺の思い違いだったのかもしれない。

「そりや……楽しいですから」

俺は口ごもった。

「ええ、夢中になれることがあるのは、いいことです。ですから、たとえ悪代官のコンテストであろうと、悪代官に食べさせるものであろうと、貴方には少しでもいい環境にいて欲しいと、そう思うわけなんですよ。私は」

「カル口神父……」

俺は呟き、それから、少し前から気になっていたことを言った。

「……あの。神父が悪代官、悪代官と連発するせいで、俺にはさっぱり、その貴族の名前が思い出せなくなっただんですが……」

「どっちでも構わないでしょう。悪代官で十分です」

「……」

やっぱり神父は、貴族に恨みでもあるんだろうか。

グローニ通り第一教会（2）

それからすぐに、コンテストに向けての準備が始まった。

繰り返しになるが、俺は貧乏だ。隣近所も貧乏だし、カルロ神父も貧乏だった。だから、準備といっても、貴重な食材を無駄にはできないし、必要な材料すら集められなかったりするわけだ。

だから俺は、本の小部屋に籠もって、料理本の文字をひたすら目で何度も追った。丹念に読み込み、イメージを膨らませる。

見たことのない食材や調理法が、そろそろと並んでいる。でも、今までのように、知らない言葉が出るたびに当惑しているわけにはいかないんだ。ひよっとしたら、本当にひよっとしたら、将来はそういうものを使う身分になるかもしれないんだし。

不思議だ。そう思うだけで、意気込みが違う。

「女中に命令したりするときに、材料の名前が分からないでは、困りますからね」

そう言いながら、カルロ神父は自分の荷物の中から、まだ解いていなかった包みを解いて、さらに数冊の料理本を見つけ出してきてくれた。

「気取った言い回しとかも、覚えておいたほうがいいでしょう。些細なことで、周りから馬鹿にされては時間の無駄ですし」

「……カルロ神父。神父は俺がコンテストに勝って、悪代官の料理人になれると、そう信じているんですね？」

俺は、読んでいた本から目を上げて、そう尋ねた。

尋ねずには、いられなかったんだ。

当たり前だが、俺には自信なんてない。

頑張っではいるけれど、だからこそ、俺には自分の限界がよく見える。

料理を始めたのは数年前で、それまでは食うか食わずかの生活だ

った。舌だって肥えていないし、手つきだってまだ、不器用にも程がある。

知らないことは山ほどある。食べたことの無いものも。

不安に思わないほうが、おかしいと思う。

「信じていますよ。いや、貴方ならなれると思っています」

「……いつたい、どうしてですか」

俺は、重ねて聞かずにはいらなかった。

具体的な言葉を聞きたい。俺を安心させる言葉を。

俺には分からないが、カル口神父なら分かっているのかもしれない。俺を安心させるような何かを。

カル口神父は、しばらく小部屋の戸口で、小太りの天使のように微笑んでいた。それからようやく、鳩のような声で言った。

「私はずっと、貴方の作った料理を食べていますからね。こう見えても、私は昔、かなりの美食家だったんですよ」

「見れば分かります」

俺は、神父の腹をじっと見つめながら答えた。

ところが神父は、それがお気に召さなかったらしい。

拗ねたように唇を歪めると、高い声で言った。

「量の問題じゃないんですよ、ロツズ君！ まあ、私がいっぱい食べたことは確かですが。美食家というのは、味にうるさい人のことを言うんです」

「……はあ」

「大層な金持ちとは言いませんが、お金には困らない場所にいたんです。それで、毎日いい服を着て、美味しいものだけ食べて……」

言いかけて、神父は黙った。

苦笑する。両手を上げて、肩をすくめた後、ぽつりと続けた。

「そんな時代があったんです、私にも」

……ああ、話したくないことを、今話そうとしていたんだな。

俺はそう察した。察しないわけにはいかない。

神父の顔には、「これ以上聞かないでほしい」と、これ以上ない

ほどくつきりと描かれていたから。

「……そうですか。それなら、信用できるかもしれませんね」

俺は努めて、好奇心を押し殺して言った。

神父のことだ、話したくなったら話してくれるだろうが、そうでなければこれ以上は話さないだろう。

「じゃあ、貴族の連中が普段どんなものを食べてるか、教えてくださいよ。そしたら俺、それを参考にしますから」

「いやいや、それはやめたほうがいいでしょう」

快く頷いてくれると思ったのに。

なぜか、神父は首を振った。

「それをしては、貴方のためになりません。お母さんは心を鬼にして、黙っておきます。辛くても、一人で頑張るのよ、ロッズ君！」

「……お母さんって、誰のことですか。しかもスパルタ母さんですか、いきなり」

「まあ、それは置いといて」

自分で振ったくせに、カルロ神父は堂々と話を棚に上げた。

「実はね、話しても何にもならないんですよ。料理コンテストは、料理人の手持ちの材料だけで、料理を作って持つていくという話ですから」

「手持ちって……」

一瞬、内容が飲み込めなかった。

次の瞬間、頭が真っ白になる。

誇張じゃない。本当に白くなつたんだ。

（だって、俺の手持ちの材料っていったら……）

気付いたら、神父が俺の袖口を引っ張っていた。

「ロッズ君、ロッズ君。その河を渡ってはダメですよ。この世に戻れなくなります」

「……っ！ だ、誰も、あの世の河なんて渡ってないですよ！ 物騒なことを言わないでください。ちよつとぼーっとしていただけです」

衝撃で。

そう、俺は衝撃を受けていた。

これまで、俺が貴族たちが好みそうな料理が出てくる料理本ばかり眺めていたのは、何のためだったというんだろ。

そりゃ、コンテストで、いかにも悪代官に喜ばれそうな料理を作るために決まっている。

コンテストの会場で、見たこともない材料が出てきても、戸惑わないようにするため。

使ったこともないような道具を見たり、料理法を見ても、なんとか対処できるようにするためだ。

しかし、それが全部、無駄な努力だったとしたら？

「……む、無理ですよ。神父。それじゃ……」

俺はいきなり重くなった額に手を当てて、低く呻いた。

それまでいい気になって、立派な料理人の服とか着て、女中たちに命令している自分を想像していた（んだ、実は）。そこから急にどすんと突き落とされたような気がする。

期待が大きかっただけに、しばらくときの気持ちは、重く地を這うようだった。

「いったい俺に、どんな材料が用意できるっていうんです。立派な台所を持っているような料理人とは、全然環境が違うんですよ？

俺に、立派な料理が作れるわけがないじゃないですか。作れるのは、切れっ端みたいな料理ばかりで……」

「ロツズ君」

カルロ神父は、壁に背を付けてへたりこんだ俺の前に、ゆっくりと屈みこんだ。

神父服の縫い目が、突き出た腹の重みで膨らむのが見える。カルロ神父、大丈夫なのか。これ以上太ったら危ないよ。

などと言う気力は、今の俺にはない。

ただ絶望に目を光らせて、その場にわだかまるだけだ。

そんな俺の前で、神父は神の使いのように優しく神々しく微笑み、

「切れっ端、大いに結構」

ごくごく優雅に、確信に満ちて言った。

「……」

正直に言おう。

カルロ神父はどう見ても美男じゃない。まるまるとした小太りの親父さんで、しかもたまにオカマ喋りをしたりして、俺をげんなりさせる。

悪い人じゃないんだが……と、俺はいつも思っていた。

そのカルロ神父がだ。

今、俺の前で言い切ったのを見たら、俺は、「この人なら……信じられる」とか、思ってしまったんだ。

場の空気に吞まれたとは思えない。

神父の発する威厳と確信に満ちた空気が、そんな気持ちにさせたんだ。

神父と視線が絡み合う。

神父の視線は、どこまでも慈愛に満ちて優しい。幼い子供を導くために遣わされた、天の使いのように。

俺は、ゆっくりと尋ねた。

「切れっ端……結構ですか、神父」

「ええ、結構です」

「切れっ端……そうか、切れっ端は、結構なのか……」

「ええ」

「切れっ端……」

「そうです、切れっ端です」

「……」

そこでようやく、我に返った。

さっきから俺と神父、「切れっ端」と「結構」しか言ってない。何とも意味不明なやり取りをしてしまった。

疲労感だけがいや増す。

だが、ここで負けるわけにはいかない（なぜかそのとき、俺はそう思った）。

「カル口神父、訳の分からんことを言わないでください！ 俺は真剣なんですよ？」

ばさつと立ち上がると、俺は神父の鼻先に指を突きつけた。

「切れっ端は結構、つて、さっぱり意味が分かりませんよ！ 人からかってるんですか？」

「まさか。私はいつも貴方をからかってなど……いないわけではありませんが、今はからかってませんよ」

いつもなら、「人に指さすなんて、行儀が悪いですよ、ロッズ君」などと言うところだが、神父は真面目に答えた。

「分からないなら、説明しましょう、ロッズ君。聞きなさい」

「いいでしょう、教えてください」

「よしよし。あのですね、ロッズ君。普通の貴族というものは、普通の高級料理には飽き飽きしているものなんですよ」

「……はあ」

「退屈しすぎていて、珍奇なものが食べたい。生半可な高級料理など、面白くもない。それが、貴族というものなんですよ」

そういうものだろうか。

だけど俺は、貴族を知らない。神父は、知っている。

「それで……俺にどうしろと？」

おずおずと尋ねると、神父は威張った鳩のように、大きく胸を膨らませた。

「そうですね、そこなんです。貴方が唯一優位に立てる場所といったら、そこしかないんです。貴方はまあ、才能と情熱はあるけれど、やっぱりまだまだ未熟。知識も技量も、圧倒的に足りない。でもね、普通の料理人には思いつかないような、斬新な料理を作れる可能性を持っているんですよ」

「あの……まさか」

だんだん、結論が読めてきた。

「まさか神父、それがあり合わせを使った切れっ端料理、とか言うんじゃない……」

「ふっふっふ」

「……あの、神父……」

「ふっふっふ」

「……」

「その通りですよ、ロツズ君……！」

ああ。

神父らしい素敵な答えだ、と思うべきなのか。

カル口神父本人は、なぜかいたく満足そうなのだが。

俺にはもう、何がなんだか分からない。

とりあえず言えるのは、この人に付き合っていると、なんだかどつと疲れが出る、ということだけだ。

「肉は……どうしても、干し肉しか手に入りそうもないな。角の食料品屋で売ってるやつは、塩気が濃いから、うまい塩抜きの方法を考えないと……。波止場まで行けば、何か魚が手に入るか。魚なんて、貴族が食うのかな……いや、だからこそいいのか」

「ロツズ君、あまり根を詰めるんじゃないやありませんよ。どうせ足りない頭の容量が、コンテスト前にパンクするだけです」

「……」

ぶつぶつ呟きながら、檻に閉じ込められた猛獣のように歩き回る俺。

距離を置いて、温かい(?)声援を送ってくれる神父。

(ああダメだ、このままずるずる行き詰りそうな気がする)

さすがに俺も、危機感を覚えてきた。

コンテストまで、あと一週間。

「ちょっと、気晴らしに外でも歩いてきます」

俺は言った。

波止場の潮風にでも吹かれれば、いい考えが浮かぶかもしれない。
込み入った頭の中身を、少しでも整理したかったんだ。

「ああいいですね、いつてらっしゃい」

神父が生返事を寄越す。その手元には、早朝からずっと、神父が
取り組んでいる書類がある。

グロー二通りには、身寄りのない子供が沢山いる。

誰から生まれたのか分かっている俺はまだ、ましなほうだ。父親
も母親も誰だか分からない、なんていう子供も、結構いたりする。
そういう子供たちのため、身元証明書類をでっちあげて、学校や
ら養子縁組やらに送り出すのもまた、神父の日常の仕事だった。

（まさか神父、結構、危ない橋を渡ってるんじゃないだろうな……）

俺はふと、疑念を覚えた。

振り向いてじっと見つめるが、神父はそんな俺の視線に気付く様
子もない。

分厚い書類を丹念に読み返しては、丸い小さな文字をちょこちょ
こ書き入れている。

太った白い顔には、いかめしい眼鏡。

普段満面の笑顔を浮かべている神父にして、珍しく真剣極まりな
い表情だ。

（まあ、いいか）

いつもどおり、俺は何も聞かないことにした。

神父がいかにかに犯罪すれすれのことをやっていようが、俺には関係
ないことだ。関係ないと思いたい。

（それより、俺には目先に差し迫ったコンテストが……）

教会の扉を開けると、眩しい陽光が瞼の上に降り注いだ。

俺は思わず目を伏せて腕をかがげ、大きく前に足を踏み出して……
…。

「ぐぎゃっ」

何かを、思いつき踏み付けた。

「……」

靴底を通して、微妙に柔らかかった。

かといって、潰れるでもない。しつかりした固形物だ。

細いが、骨組みはちゃんとある。周りの草むらに顔を埋め、すっかり石畳と同化しているようだが……。

「う、うわあ！ し、死体！ 死体踏んじったよ！」

一瞬、目の前が真っ白になった。

かろうじて認識できたのは、その死体が金色の、綺麗な絹糸のよ
うな髪をしていることだけだ。

「カルロ神父！ 神父、こんなところに死体が……！」

「い、いや、まだ、死んでない……」

「いや、死んでるって！ 死んでなかったとしても、俺が今踏み付
けて殺しちゃったし！」

夢中で叫び返してから、ふと我に返った。

恐る恐る腰をかがめ、倒れている相手を覗き込む。

「……あれ、生きてんの？」

「……そろそろ、死ぬかもしれない……」

やや掠れて低くなっているが、ちゃんと聞き取れる声だ。
なんだ。生きてるじゃないか。

無駄に驚いて損した。

（まったく、驚かせんなよ……）

理不尽な怒りを感じたが、俺はすっかり冷静に戻って、やってく
る神父を待った。

「どうしました、ロズ君」

「神父。死に掛けてる人がいるんですけど、どうします？」

「おやおや」

神父は困ったような顔をしたが、慣れた様子で屈みこんだ。

「大丈夫ですか、貴方？　こんなところでどうしました？」

「……」

「返事がありませんね。ただの屍かもしれません」

「かつ……勝手に殺すなよ神父！　さっきは確かに生きてたぜ？」

「ほら、息してるじゃん！　手も動いてるしさ！」

「ははは、いや、ただ言ってみただけですよ」

こんなときまで、漫才か神父。

俺はいつそ、神父に尊敬の念を覚えた。

「教会の中に運びましょう。ロッズ君、そっちの肩を持って」

「はいはい」

不承不承、神父の指示に従う。

見た目よりも、ずっしりと重い。すっかり力が抜けているせいだろうか。よたよたしながら廊下を進み、奥の小部屋の寝台に、相手を寝かせた。ベッドが余っていて良かった……というか、ここは教会にいたとき、俺がいつも寝ている部屋なんだが。

（こいつがいる間は、俺は薄暗い屋根裏部屋に戻らなきゃいけないのか……。だけどまあ、いいか。……美人だし）

正直に言おう。

美人に弱いのは、男女問わず全世界がそうだと思うんだ。

それも、滅多に見えないような、浮世離れた絶世の美人なら、なおさらだ。

俺は周囲の環境が環境だから、厚化粧した「即席美人」なら、見慣れている。でもこんなふうに、化粧つ気も（ついでに血の気も）ない、美人薄命という言葉が似合いそうな、たおやかな美人というのは初めて見た。

色が薄いせいなのか、皮膚そのものが薄いのか。血の血管が青く透けて見えそうだ。

いや、今はぐったりしているから、そんなふうに見えるのかもしれないが。

しかし、それにしても。

「貴族のお嬢さんですかねえ……着ているものは立派でしたね」

「お嬢さんって……。神父、わざとボケてんの？」

「はい？ 何がです？」

神父がにこにこ俺を見下ろす。

「どう見ても綺麗な、お嫁入り前ぐらいのお嬢さんではありませんか？ おや、ロズ君、何を引いた目で見てるんです？」

「いや、だから……カルロ神父、こいつ、男だろ？」

「え？」

……なんてこった。

神父はたまに、鈍いのか鋭いのか分からない。

ぼーっとしておいて、切れ者と思わせることもあるし、そう思わせ
ておいてやっぱり、実は何も考えていないのかもしれない。

金色の髪が、肩の辺りまで伸びて、薄暗がりでぼんやりと輝いて
いる。長い睫毛がぴったりと閉ざされて、頬に影を落としていた。

確かに絶世の美女で、それも薄命の美少女にしか見えないけど。

服装は男だし。体格だって、女の子にしては骨ばりすぎ、いかつ
すぎる。規則正しく呼吸するたびに、喉仏だって見えるじゃないか。

神父はどうも、世間離れしすぎて、頭も世間離れしているらしい。

「おやおや。言われてみれば、そうですねえ」

「……まあ、確かに、顔は女みたいだけどな」

彫刻のように高くて細い鼻筋。しみ一つない、白い膚。じっと目
を閉ざしているから、目の色は分からないけど、きつと綺麗な色を
しているんだろう。

呼吸はしてるみたいだけど、まさか、このまま息絶えたりしない
だろうな。

貴族のお坊ちゃんだか何だか知らないが、教会の入り口までやつ
てきて、そのまま遺言も残さずに死ぬなんて、酔狂にも程がある。
後始末をどうしろというんだ。

そんなことを考えて、俺がひたすら気を揉んでいると。

「……おや、この方は……」

「ん？」

横で見下ろしていたカルロ神父の口から、驚いたような呟きが洩れた。

見ると、初めて見たように、相手の顔をまじまじと見下ろしている。

「どうしたんですか、神父？ こいつのこと、知ってるんですか？」

俺は何気なく聞いた。

神父の答えは、一瞬遅れた。

でも、俺を振り返った顔はいつもどおりで、白くてつやつやして、愛嬌たっぷりに微笑んでいたから。感じ取る前に、その違和感はどこかに消えてしまった。

「……いえ。ちょっと、記憶にある顔だと思ったのですが……気のせいだったようです。それにしても、美人さんですねえ」

「神父、少し、ボケを疑ったほうがいいんじゃないの？ そろそろ、いい年なんだし……」

「こらこら、年の話を出してはいけませんよ。ナイーブな私のハートがきゅんと痛みます」

「……なに、その表現」

病人の休んでいる部屋で、騒ぎ立てるわけにもいかない。

俺たちは小声で言葉を交わしながら、そっとその部屋を出た。

俺の背後で、ぱたりと扉が閉じる。

豆とお姫様

「あのさあ、カルロ神父。こういう話を、知ってる？」

あれから、三日後。

あれから、というのは、教会の入り口で行き倒れた青年を、俺と神父が拾ってから、ということだ。

俺は部屋の壁に寄りかかって、指の爪を噛みながら言った。

「二十枚の敷布団と、二十枚の羽根布団の下に、えんどう豆を一つ置いたベッドで眠ったお姫様の話」

「なんですかそれは？ 童話ですか？」

カルロ神父は口の中をいっぱいにして、もぐもぐと動かしながら言う。

食卓に並んでいるのは、俺の作った人参入りのパンと、具がいっぱい入ったポテトサラダと、豆のスープだ。その目はひたすら食卓に注がれていて、俺の話には全く興味のなさそうな色が浮かんでいるが、俺は気にしない。

勝手に続ける。

「神父の本棚のなかに、あつただけどき。昔々、あるところに、本物のお姫様と結婚したい王子様がいたんだって。ずっと探していたんだけど、見つからなくて……」

「高望みの男って、いますよね。ご苦労なことです」

「ところがある嵐の晩、凄風烈風のなかを、一人のお姫様が城にやってきて、『私が本物の王女です。本物の王子様と結婚するためにやってきました』って言うんだ」

「なんとまあ、行動的な。それは確かに、本物のお姫様かもしれませんね」

「で、王子のお母さんが、王女のためにベッドをしつらえるんだけ

ど、二十枚の敷布団と、二十枚の羽根布団の下に、一個のえんどう豆を置いとくんだ。そしたら、翌朝お姫様が、『あんな酷い寝心地のベッドは初めてでしたわ!』とか言うから、これが本物のお姫様だ、っていうことになって……」

「ちょっと待ってください、ロッズ君」

カルロ神父は制止すると、一心に咀嚼して、口の中のものを呑み込んだ。

「……ふう」

一息ついて、俺に顔を向けるなり、

「暴風雨に耐えられる女の子が、えんどう豆一つで文句を言うんですか?」

「問題はそこじゃないんだって!」

俺はがくりときた。

「物のたとえなんだよ。高貴な人間ほど、細かいところにケチをつけるっていうか、繊細だっと思うじゃないですか? 少なくとも、俺と同じベッドで、気持ちよさそうに爆睡してる、っていうのは納得できない」

「爆睡?」

「忘れたんですか? あいつが来てから、もう三日経つんですよ?」

俺は冷たい口調で言った。

カルロ神父は優雅に口元をナプキンで拭き取ると、そんな俺に向かってにっこりと微笑んでみせた。

「まさか、忘れてはいませんよ。あの綺麗な青年ですね? まだ寝ているんですか? 死んでいるわけではなくて?」

「……死んでないですよ。俺、何回も飯を運んでやったし」
溜息をつく。

あの翌朝。

部屋を覗き込んでみたら、ぱつちりと開いた灰色の目と目が合った。

見知らぬ部屋で目覚めたというのに、全く動じてもない。悠然

と微笑みかけてきたので、無視するわけにもいかず、声をかけた。
以来、あいつは部屋から出る様子もなく、大抵の時間は、気持ちよさそうにベッドで眠っている。

たまに俺が食事を持っていくと、そのたびに目を覚ますので、数回、短い話ぐらいはしたが。

「やたら、くつろいでるんですよ。知らない場所にいるはずなのに」
「へえ？」

神父は軽く片眉を上げた。

「大分、弱っているようでしたからね。まだそこまで頭が回らないのでしょう」

「……弱ってるって……あいつ、毎回、飯を三杯は食べるんだぜ」
俺はぶつぶつと呟いた。

「あんな見た目なのにさ。食い意地だけは張っててさ。なのに相変わらず、どこから来たのかとか、なんで行き倒れてたのかとかは、全然言おうとしないし」

「ほお？　ともかく、短い間に仲だけはやたら良くなったようですね？」

「いや、仲良くしてないし。（神父とは違って）不審人物を放っておけないだけだし」

俺は苦々しい口調で言った。

いくら貧乏教会とはいえ、何かしら、盗むものはあるだろう。

ひよっとして、貴族を装った盗賊かもしれないのに、疑いのかけらもなく、何をのほほんとしているのだろう。

そう思うのは、ひよっとして俺だけなのか。

「……もう、いいです。お皿、下げといってくださいね」

またもや食事に集中しはじめた神父を置いて、俺はどこか足音を立てて、台所に向かった。

癪に障る。障るのだが、腹をすかせた人間を、俺は放っておくことができないのだ。

腹をすかせた状態がどんなものか、俺はよく知っているし。

（本当に貴族が、こんなものでいいのかな……）

昨夜の残りご飯を軽く温めて、それぞれ皿に盛る。

豆と干し肉の出汁で煮た、柔らかいご飯（米を食べるのは、南部の風習だ）。オープンで焼いた野菜に、香草入りの塩を振ったもの。干し鰯と野菜くずのスープ。

それに、神父に出した昼食の残り。

軽い昼食レベルでは、とても足りないのだ。

さらに、変哲もないが冷たくて澄んだ水に、ミントの葉を数枚ちぎって放り込んだ。

お代わり用のご飯を別に盛ると、お盆の重さでぐらぐらしてくる。

（ちっ……行くぞ）

なけなしの気合を入れて、俺は奥の小部屋へ向かった。

「入るぞ？」

声を張り上げてから、扉を押す。

ノックするには、手が足りない。

「飯、持ってきた」

いつもどおり、鍵はかかっていない。ギイと音を立てて、扉が内側に開いた。

病人が寝ているから当然だが、部屋の中は薄暗く、そして微かに、香草の匂いがした。

「飯……」

そこで、俺の動きは止まった。

いつもどおりの部屋の中に、いつもとは違うものがあつたからだ。

「……誰だ？」

声が重なった。

やや高めの俺の声を掻き消すように、低く地に響くような、威圧的な男の声。

背の高い男が、鋭い眼光をこちらに向けて、部屋の中央に立って

いる。

まるで、無礼な不審者を見るような目つきだ。

（いや、そっちのほうが不審者だし。ここ、いちおう俺も暮らして
る教会なんだけどな……）

いつの間に入り込んだんだろう。

「……この者か？」

しばらく俺を凝視していた男が、再び口を開いた。

俺は唾を飲み込んで、頷く。

両手で捧げ持ったお盆が、ずっしりと重い。早く下ろすことばかり考えていたから、結構限界だったりする。何でもいいから、これを下ろしたい。

でも今は、少しでも不審な動きをしたら、この場で叩き殺されそうな雰囲気だ。

「そうか。教会の下働きか。とてもではないが、殺傷能力はなさそうだな。敵だとしても、物の数ではあるまい」

勝手に決め付けられた。

なんというか、思ったことをそのまま口にする奴だ。

「……あの、本当にあんた、何者ですか？」

少々むかついたが、俺はそれなりに大人だから、穏やかに訊くことにした。

俺にだって、訊く権利はあると思う。

でもこの男（明らかに不審人物）は、完全に俺の言葉を、右から左の耳へと流したようだ。

「何か用があるなら、さっさと済ませて出るがいい。この方が目覚めになるまで、俺はここにいる」

「はあ」

なんだこいつ。

とは思ったが、お盆を下ろせるのは正直、有難い。

そろそろと壁際のテーブルに近づき、お盆を下ろそうとしたとき。

「待て」

制止の声がかかった。

お盆をテーブルに載せたまま、俺が振り向くと、男の目がこちらを睨んでいた。

緑色の目だ。

「その上には、何が載っている？」

「何って……ご飯だけだ。この人に食べさせようと思って」

寝台で眠る人のほうへ、軽く指を向ける。

狭い小部屋で、男二人がむさ苦しくやりあっているというのに、寝台の主は全く目を覚まさないらしい。金色の髪を枕に広げて、のんびりとした寝顔で寝入っている。

「飯……」

少し意外そうな表情になって、男は呟いた。

よく見ると、それほど老けてはいない。二十代前半といったところで、やや痩せてはいるが、引き締まった目元や口元に、若々しさがある。

それ以外は、あまり目立たない男だった。

鋭い眼光と、その態度に圧されたせいもあるけれど、黒髪と黒い服が保護色のようになって、部屋の薄暗がりにならぬようにしているのだ。

「そうか。お前もこの方の人徳に心酔して、陰ながら支えようと決意したのだな。物の数に入らない下等市民ながら、その心意気はなかなか、見所があるではないか。いや、それもこの方の魅力のなせるわざか……」

「……はあ？」

今、さりげなく（？）無礼極まりないことを言われたような気がするが。

相変わらず、男は全く聞いていない。

寝台のほうに顔を向けて、ぶつぶつと言っている。

「さすがはセオドア様です。貴方は、全国の高位貴族から奴隷たちまで、全ての者を魅了しきってしまう。この混沌の時代を担う、たった一つの光明と言ってもいい。だが、この光を恐れ、消し去ろう

とする不屈き者が、いかに多いことか。それを思うと、俺は全く、心休まる暇もない……」

「……」

わけが分からない。

（セオドア様って、ここに寝てる金髪野郎のことかな。文句も言わずこんな場所でぐっすり寝こけて、質素な教会の家計を破壊しかない食欲で、毎日飯ばかり食ってる、こいつのことか？）

そのことは、後で（機会があれば）ただしてみるとして。とにかく、俺は言いたい。

（なんだ、こいつは。よそでやれ）

自分に酔っているのか、「セオドア様」に酔っているのか知らないが、何も俺たちの教会で、この小部屋で、俺だけが観客とか、どう考えてもうそ寒すぎる。

そんな俺の心境など知るはずもなく、男はくるっと振り向き、俺にびしりと指先を突きつけた。

「いいか。この方のためなら、俺は死ねる」

「……」

（心底、どうでもいい）

頼むから、ポーズを決めて、そんな台詞を吐かないで欲しい。

「……はあ、そうですか」

「だが、この方はいつでも命を狙われる立場にあつてな。高貴な身ゆえ、多少の敵は仕方がないのかもしれないが、それにしても多すぎる。奴隷騎士として、俺が常に身辺に気を配ってはいるが、少し目を離しただけで、このさまだ。こんな下等な街で、下等な教会で発見されるとは、なんとおいたわしい……」

「え、ちよっと待って。あんた、奴隷騎士なの？」

「む？」

ようやく、俺の姿を認識したらしい。

緑の目が瞬いて、こちらを見つめる。俺より、頭一つ半ぐらい背が高い。

「そつだ。私はセオドア様の奴隷騎士だ」
はつきりと言い切る。

「奴隷……」

初めて見るわけじゃない。

でも、こんなに近くで、大人の奴隷を見るのは、初めてかもしれない。

しかも。

（なんて偉そうな奴隷なんだろう）

こんな奴隷が存在していること自体、ちょっとした驚きだったりする。

グローニ通りは貧乏人の居場所だから、奴隷なんて連れている奴はいない。

でも、通りを離れば、貴族が大量の奴隷を連れて歩いているのが見られるし、平民の家でも、奴隷を使っていることはある。

彼らは皆、身体のだこかに黒い刺青を入れている。

この男だって、正面から見れば、確かに奴隷だ。右の頬から耳にかけて、唐草文様のように渦巻く黒いしるしが彩っている。

ただ、揃っていない前髪を無造作に掻き分けて、横に流してあるのが、上手い具合に目隠しになっていて、一見、気付かなくしているだけだ。

（つまりだな。身分としては、一応は平民の俺のほうが、上になるわけだ。でもなんでこいつ、こんなに偉そうなんだ？）

「……それで、その奴隷騎士が、ご主人を迎えに来たのか？　こんなところまで、ご苦労だったな」

本当にご苦労なのは、こいつの世話をしていた俺だと思うんだが。俺はわざと、嫌味っぽい口ぶりで言った。

「……」

聞いているのか、いないのか。

またしても、寝台で眠るセオドア様とやらに視線を移し、じっと見つめていた奴隷騎士が、こちらを振り返った。

俺の嫌味に反応するでもなく、

「うむ。そのとおりだ。数日とはいえ、この方に対するご奉仕、良くやったと褒めてやろう」

「……それは、どうも」

なんというか、俺はもう、「帰っていいですか」と聞きたい気分だ。

いつまでも、こんなやり取りに付き合わされたくない。

振り回され損、というやつだ。

セオドア様とやらも、この奴隷騎士も、もうどこか、やって来たところに帰ってくればいいのに。

「じゃあ、俺はもうお役御免ですね。早く、セオドア様を連れて帰ってください」

「うむ、そうしよう」

奴隷騎士が頷き、寝台に一步、近づく。

あまり、表情のない横顔。まるで、痩せた鷹か何かのように見える。そういえば、名前とか、聞いてなかったな。

(そんなことは、どうでもいいんだけど)

そう思った瞬間、声がした。

「オズワルド、何だ、お前か」

「……はっ」

寝台に横たわっていたはずの人物が、声を発したんだ。

灰色の目がぱっちり開いて、目の前の奴隷を凝視している。

同時に、枕上に広がっていた金色の髪が、さらさらと流れて、肩の下に流れを作った。

上半身だけ起こして、奴隷と、その向こうにいる俺を交互に見つめる。

オズワルドと呼ばれた奴隷は、すでに寝台の前に膝をついて、かしまっていた。

「セオドア様」が口を開く。

「……ふわーあ」

いきなり、しまらない欠伸をした。

いかにも眠そうな顔だ。一日二十時間は寝ていると思うのだが、まだ寝足りないらしい。

相変わらず、顔立ちだけは女のように美しかった（ただ、眠っているときは「美女」に見えたが、今ではやや、少女っぽく見える）。その顔全体に、いたく面倒くさそうな色を浮かべて、オズワルドを見下ろす。

「お前、ようやく来たのか。さっきまで、可愛い子に起こされる夢とか見ていたのに、相手がお前じゃ、台無しだな」

「はっ、申し訳ございません」

「ロツズ。なんで、こいつを近づけたの？　せつかく今日も、君に起こしてもらえと思ってたのに」

「……」

俺とオズワルドと、二人同時に微妙な表情をする。

何が言いたいんだ、こいつ。

オズワルドは「セオドア様」の前だから、俺にあからさまな敵意の色を向けたりはしないが、どこかピリピリしたものは伝わってくるし。

俺は俺で、セオドアが何を言いたいのか、よく理解できない。

単に、お迎えの奴隷騎士に嫌味を言いたいただけなんだろうか。

「お迎えが来たんだから、いいじゃないですか。さつさと荷物……はないから、その奴隷騎士ごと、家に帰ってください」

「うわ、冷たい。ロツズが冷たい」

綺麗な眉をぐぐつと寄せて、セオドアが苦悶の表情を作った。

「ロツズに冷たくされるなんて、青天の霹靂だ。どんなときも、ロツズだけは優しくしてくれると思ってたのに」

「貴様、ロツズとやら！　セオドア様がご心痛だぞ、なんと責任をわきまえる！」

「オズワルド、お前のせいだな。お前が来たから、ロツズが冷たいんだ。お前が悪い」

「はっ。お許しを、セオドア様。この命で贖えるものでしたら、このオズワルド、いかような処分もお受けいたします」

「……」

あのさ。

俺、本当に帰っていいかな。

(いや、違うな)

ここは、俺がこの部屋から立ち去ればいいんだ。

そうしたら、こんなやり取りは見なくてすむし、つき合わされずにすむ。

そう悟って、俺がきびすを返そうとしたとき。

「ロツズ、今日のご飯は？ 何を持ってきてくれたのかな？」

「いつもどおり、あり合わせですよ。他に、何があるっていうんですか」

食事の話を振られると、無視はできない。俺は、ぶっきらぼうに答えた。

「ご飯は？ 米？」

「そうですよ」

「やった！ 嬉しいな」

子供のように無邪気な声を上げて、セオドアが手のひらを打ち合わせる。

……ひょっとして、本当に子供なのかもしれない。

俺はあまり深く考えたことはなかったが、こんなに線が細く見えるのも、男臭さのようなものを漂わせないのも、こいつがまだ子供だから、ということの表れじゃないのか。

(……でも、こいつは)

成長期ゆえの食欲、なんてものじゃない。

こいつの、食事にかける貪欲さは、思わず俺が「こいつは……本物だ」と呟いてしまいそうなほどだ。

今だつて、すぐさま盆に飛びつくと、いそいそと部屋の小さな円テーブルに運び、皿を並べている。

オズワルドが手伝おうとしているが、まるで躰の悪い犬が手を出したように、しっしつと追いやられていた。……なんとなく、気の毒だと思わないでもない。

「ご飯、ご飯……豆入りのリゾットだ、おいしそうだな！ 私、ロツズが作る野菜スープって好きなんだよ。このスープ、白身魚が入ってて、特製だね？」

「干し鰯……セオドア様は、食べたこともないでしょうが」
俺は渋い顔をして、呟く。

昔から、この一帯でよく獲れる、大衆魚だ。塩漬けにして、日持ちをよくしてあるから、とても安い。冬場の貴重な栄養源だったりするのだが、普通はかなりしょっぱい。

塩抜きの方法をいろいろ工夫して、できるだけさっぱりした味を出しているつもりだ。

「ああ、ないね。ここに来て、いろんなものが食べられるのが楽しいよ。不思議だね。肉団子とかいっぱい入った、目にも豪華なスープより、ロツズの作る野菜スープのほうが、おいしく感じるなんて」
「……はあ」

スープのダシが、良かったのだろうか。

俺は何からでもダシを取るけど、大体いつもは、鶏の骨から取ったダシと、魚の骨から取ったダシを交互に使っている。

肝心の肉がなくても、骨だけは結構、いつも手に入るし。

じっくり時間をかけて煮て、大量に作ったものを瓶に詰めて、地下室に置いておく。

そして、二日ぐらいで使い切るんだ。

「ほう。悪くはない」

オズワルドが、驚いたように言う。

気が付くと、いつのまにか、セオドアの横に座り込んで、ごく自然に食事にありついているじゃないか。

なんだこの流れは。

セオドアはセオドアで、気を悪くした様子もなく、

「これも美味しいよ。ほら、食べてみなよ」

とか言っている。

「ロツズが最初に持ってきてくれたお粥も美味しかったな。じんわりあったかい味がして、あっさりしてるんだけど美味しくて……」

「そうか。この少年は、見た目によらず、優秀な料理人なのですね、セオドア様」

「見た目によらず、って何だよ。ロツズは見た目もいいじゃないか」

「ははっ。セオドア様がおっしゃるなら、その通りでございます」

「米って美味しいな。普通、サラダかデザートにしか使わないと思っただけ」

「南のほうでは、普通に主食ですから」

俺はなんとなくこの流れに乗り切れず、ぶっきらぼうに言う。

褒められているのは分かるのだが、こんなに褒められていていいのだろうか。

妙に不安だ。

「北部で食べるのは、冷たい米ばかりでしょう。俺は、冷たいのはあんまり好きじゃないんで」

「ふうん、ロツズは実際の腕前だけじゃなくて、知識も深いんだね？」

「……」

それは、本ばかり読んできましたから。

という言葉を呑み込み、俺は肩をすくめた。

「材料が揃わないんで、何でも利用できるものは利用するしかないんですよ。庶民は。工夫しか、やることがないっていうか」

「素晴らしいな！」

セオドアが叫んだ。

俺の手を掴んで、ぶんぶんと振りかねない勢いだ。

「本当に素晴らしい、最高だよ、ロツズ！ 君って最高！」

「……あの、えっと……？」

なんだろう、この感激っぷりは。

「あの……俺、そんなにたいしたものの、食べましたっけ？」
繰り返して言うが、これ、残り物なんだけど。

「うん！ 君の料理、好きだよ！ なんていうか、天才っていうのは、どんな場所にも転がってるもんだね！」

「天才……」

俺は、渋い顔で呟いた。

言葉が、続かない。

幾ら言われても、俺は自分で、天才なんかじゃないと分かってる。俺はただ、手に入ったものをできるだけ美味いように、美味いようにと料理して、本を読んで見知らぬ料理に憧れ、見知らぬ世界に憧れているだけの、貧乏で、学もない、裏町の子供で……。

もう子供じゃないかもしれないが、手が届くものなんて、ほとんど増えてない。

凄いののは、俺じゃなくて、料理なんだ。どんなに貧乏でも、少し手間や工夫を凝らせば、それなりに美味しいものが食えるという事実。そしてそれは、これまでに無数の料理人や母親たちが、無数の料理を作り続けてきて、それを今に伝えてくれたおかげなんだ。

(……でも)

それならなんで、目元がじんわりと熱くなってくるんだろう。
なんで俺、こんなに混乱してるんだろう。

セオドアの灰色の目が見られなくて、自分の心臓の音だけが、とくくと脈打っているのが聞こえる（ような気がする）。

セオドアがこちらをじっと、見つめているのが分かった。

なんとか表情をつくらって、顔を上げると、セオドアが無心な少女のように、にっこりと笑った。

「君みたいな人に会えて、本当に良かった！」

「……そうですか」

そうか。

俺、誰かに認めてほしかったんだ。

神父は初めて俺を認めてくれた人だけれど、身内、というか、どこか家族みたいな感覚が抜けないし。

子供たちは俺が作るお菓子を喜んでくれたけれど、はっきり褒めてくれたことはない。

こうして、「外の世界の人」と会って、こんなに褒められたのは、俺にとつて、初めての経験なのかもしれないなかった。

嬉しい。

そして、とても、混乱している。

胸の中が熱いの、言葉にできない。何か言おうとしたら、この気持ちまで、こぼれてしまいそう。

こんなとき、普通は何を言ったらいいんだろう。

そして、俺の混乱がまだ収まらないというのに、次の瞬間、セオドアが、妙なことを言い出した。

独り言のように、ぶつぶつと低い声で言う。

「うーん、毒を盛った伯母上に、今回はかりは感謝だな。あの人はろくなことをしないけど、たまには災い転じて幸いとなる、だね」

「は？ 毒？」

何を言い出すのか。

「は、セオドア様。やはり、それは本当でございますか？ 今回の件も、あの方が裏で糸を引いてらっしゃると……」

どうやら、オズワルドにとつても、聞き捨てならない台詞だったらしい。

眉をいからせて、セオドアに確かめている。

「それ以外にはまず、考えられないと思うなあ。隠す気も、あまりなかったみたいだよ？ 毒入り饅頭を持ってきたのが、伯母上のところで見かけた黒服だった」

「だったら！ なぜ、そこで、饅頭を食べたんです？！」

「だって、お腹すいてたし」

「……」

「そこまで、毒性が強いとは思わなかったし。もう、何度も毒を盛

られてるから、そろそろ耐性ができてるかなー、とか思ってた……」
「相手は毒のプロですよ？ 同じ毒を何度も使ってくることなど、考えられんでしょう！」

「耳元で怒鳴らないでよ、やかましい」

「はっ、申し訳ございません！」

「だったら、最初から大声を出さなきゃいいのに。まったく」
「……」

何度も思うのだが、この主従は、何かが根本的に、ダメだ。

「……あのさ」

柄にもなく、ここは俺が話を進めないと、という義務感にかられてしまった。

この二人だけだと、いつまでたっても、問題が解決しない（ということは、俺もこいつらから解放されない）。

「つまりセオドアは、自分の伯母上に毒を盛られて、こんなところにばい捨てされた、っていうこと？」

「そうそう、つまりそういうこと」

清々しい笑顔で言われた。

あっさり、言わないでほしい。

「どういつ親戚関係なんだ？ 遺産を巡る、骨肉の争いとか？ 貴族の家では、そういうことが普通なのか？」

「うーん、普通だとは思わないけど、私の家では、そういうことが結構普通かもね。喰ったり喰われたり、罠を仕掛けられたり、仕掛けたり」

「……大変な世界で生きてるんだな、あんたって」

「同情してくれるの？ だったらロツズ、もう一杯！」

「は？」

「ご飯、ご飯！」

「……はいはい」

あまりにセオドアが「腹減った！」という顔をして、お代わりをせがむので、俺はとうとう、肝心なことを聞きそびれてしまった。

こいつらは、いつ自分の家に帰るのかとか。そもそも、どこに家があつて、いったい何者なのか、とか。

俺もかなり、こいつらに毒されてきているのかもしれない。

セオドアとは四日間、オズワルドとはまだ数時間。

それだけの時間で、連中のペースに巻き込まれるとは。

（その伯母上なんかより、こいつらのほうがよっぽど、毒性が強いんじゃないのか）

そのときは、そう思った。ずっと後になると、そんな感想を持つのは間違つてたと、俺だって、心底しみじみと思うようになるわけだが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9805p/>

奴隸王の料理人

2011年1月6日03時25分発行